



Title	1900年パリ万国博覧会における韓国館構想と建設経緯
Author(s)	キム, ウチャン
Citation	フィロカリア. 2025, 42, p. 51-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/101327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1900年パリ万国博覧会における韓国館構想と建設経緯

キム ウチャン

序

1. 韓国館建設過程と先行研究の検討
2. グレオン男爵案とミムレル伯爵案の比較
- 2-1. グレオン男爵による設計図とミムレル伯爵による設計図
- 2-2. グレオン男爵案の撤去からミムレル伯爵案の企画まで
3. 韓国間のモティーフの決定の主体
韓国館建設の意義

序

19世紀末、韓国は西欧諸国との交流に積極的に取り組んだ。そうしたなか、西欧諸国に自らの文化を紹介し、アピールする機会が韓国に必要となった。万国博覧会は、そのための好個の機会であった。韓国が初めて参加した万国博覧会は、1893年に開かれたシカゴ万国博覧会である。しかし、韓国のパビリオンは建てられず、共

用の展示館の一つの区域を借りた小規模の展示にとどまって、西欧諸国の注目を集めるには限界があった。1897年、国号を朝鮮から大韓帝国に改め、改革や近代化を目指した韓国にとって、一日でも早く国際舞台で国の名前を知らせることは重要であった。¹⁾

そうしたなか、1900年パリ万国博覧会は、韓国政府にとって近代化されていく国の様子や韓国文化を国際的に紹介する機会であった。初参加であったシカゴ万博とは違い、パリ万博において韓国は用地を借用して、韓国パビリオンを建てるなど、展示施設の確保にも努力した。その結果建てられた韓国館は、韓国の宮殿である景福宮^{キョンボク宮}の勤政殿^{クンジョンジョン}をモティーフにしていた。景福宮は韓国を代表する宮殿であり、勤政殿はその中でも国王の政務や国家的な行事が行われた場所で、王室の権威を象徴する建物であった。このような建物がパリ万博で韓国館のモティーフになったことは、韓国が自らの文化を知らせるため努力を尽くした結果として考えられる。

1900年パリ万国博覧会韓国館の建設過程に関して、韓国の先行研究

はパビリオンが建てられるまでの事実関係を明らかにするところまでは至っている。しかし、パビリオンの企画段階を証明する研究は少ない。また、その過程のなかで、韓国側がどのような役割をしたのかに関する研究も十分に行われていない。西洋建築史研究者であるジン・キョンドンとパク・ミナは、1900年パリ万博で韓国館を建てるため韓国側がフランスとの協議を行い、積極的に企画に介入した結果、国を代表する建物をモティーフにしたパビリオンが建てられたとしている^②。だが、彼らの提示する一次資料を検討すると、韓国館の企画の過程で韓国が積極的に関与した可能性はむしろ低いように思われる。

それゆえ、本稿では、ジンとパクの先行研究に関する検討を行い、その議論の問題点を指摘したい。そのうえ筆者の観点から韓国館の企画過程や建設経緯を明らかにしたい。また、韓国館が景福宮の勤政殿をモティーフにしたことも、韓国側の介入の結果というよりは、むしろフランス側の企画によるものであった。このことを明らかにするために、フランス側が企画や建築過程で残した文書や図面を分析し、1900年パリ万国博覧会の韓国館のモティーフ決定の過程を検証する。

1. 韓国館建設過程と先行研究の検討

まず、韓国が1900年パリ万国博覧会に参加するまでの過程と韓国館の建設過程を概観しておこう。1893年5月7日、在韩国

フランス公使イポリト・フランダン (Hippolyte Frandin) はフランス外務大臣に韓国の万国博覧会参加督励のため、1889年パリ万博の広報物を要求する文書を送った。この文書には、韓国は参加への熱意はあるが、財政的に問題があるため、それを支援すべきだと記されている^③。韓国政府は財政面で問題があったため、フランス現地で財政の支援をしてくれる人物が必要であった。このため、1898年5月23日、アルフォンス・ドロ・ド・グレオン男爵 (Alphonse Delort de Gleon) が資金を支援するとともに、企画を担当する責任者として選ばれた^④。グレオン男爵は、韓国館構成に関する意見を出して、企画や設計の過程も担当していた。しかし、1899年11月7日、グレオン男爵は急死し、工事が進んでいた建築物が撤去されることになった。フランス公使ヴィクトル・コラン・ド・ブランシー (Victor Collin de Plancy) は、韓国にこのような状況を知らせ、韓国側に工事を続ける意思があることを確認した^⑤。その後、1900年1月からアルマン・ミムレル (Armand Minirel) 伯爵がグレオン男爵の代わりに総務委員として選ばれ、韓国館の企画を担当することになった^⑥。この過程で韓国の敷地は半分以上縮小されたが、ミムレル伯爵によって、新しい設計で韓国館が建てられることになった。その結果建てられた韓国館が景福宮の勤政殿をモティーフにしたものである。

ジンとパクの研究では、景福宮の勤政殿がモティーフになったのは、グレオン男爵が急死した後、韓国側とフランス側の協議し

た結果であるとされている。彼らは、グレオン男爵の企画はシノワズリ風であり、韓国文化に対する理解が不足しており、植民地主義意識が反映されたものであったと主張する。そのうえで彼らは、グレオン男爵の死亡によって韓国が設計過程や建設過程に積極的に参加し、フランス側と新しい企画に関して協議できるようになり、韓国を代表する建物をモチーフにした韓国館が建てられるようになったと述べている。その結果、韓国の建築物は、歪曲したかたちで紹介されるのではなく、その正統な建築様式が紹介できたと主張する。つまり、グレオン男爵が急死した結果、韓国側がパビリオンの企画や建設過程に、より積極的に参加できる契機になったというのだ。この主な根拠として、彼らは次の3つを挙げている。⁷⁾

第一の根拠は、グレオン男爵が死亡した知らせが韓国に伝わったあと、在韓国フランス公使であったヴィクトル・コラン・ド・プランシーがフランスに送った報告書の内容である。この報告書には、韓国側の万国博覧会準備委員会の副委員長である閔泳瓚^{ミンヨンザン}を、工事の完成や支部の組み立てのため、パリに派遣することが決められたと書かれている。⁸⁾ ジンとパクは、この時点ですでにフランスと展示館の建て直しに関する議論が行われたので、閔泳瓚がパリで行う業務や派遣が決められたと述べている。つまり、韓国側の責任者がパリに派遣されたのは、新しい企画が協議された結果だと主張しているのである。⁹⁾

二つ目の根拠とされるのは、閔泳瓚がパリに派遣される際に二人の労働者を同行させたとの事実だ。閔泳瓚がパリに行く際、上海まで同行したフランス軍少佐ヴィダル^{Vidal}が1900年2月1日にフランス防衛省に送った報告書には、閔泳瓚が二人の労働者を連れてパリに向かっていることが記されている。¹⁰⁾ ジンとパクは、パリでの閔泳瓚の役割が工事の完成や支部の組み立てにあったことは、展示館の工事に参加するなどの役割も担当していたことを示していると述べる。また、建築を手伝うために二人の労働者を連れていたことを指摘し、彼らは韓国建築に精通した大工だと判断している。ジンとパクは、韓国建築に精通した大工を同行させたことが、韓国側が工事に深く関与した証拠だと主張している。¹¹⁾

三つ目の根拠としては、景福宮の勤政殿が韓国館のモチーフになり、韓国建築の特徴が表れている建物であったことを指摘する。コラン・ド・プランシーの秘書として韓国で勤務した経歴があり、韓国の書物に対して調査した内容をもとに「韓国書誌(Bibliographie Coreene)」を出版するなど、韓国文化に高い関心を示していた人物であったモリス・クラン^(Maurice Courant)の記録には、空間構成や屋根と外壁の様子、建物を飾る装飾など、韓国館の様子が詳しく描写され、中国の展示館や日本の展示館とは違うものと記されている。¹²⁾ ジンとパクは、韓国で勤めた経歴があるクランの詳しい描写と、中国の展示館や日本の展示館とも明確に区別できる特徴を持っていたことから、韓国館は韓国の宮殿を忠実に再現した建物であっ

たと述べる。また、韓国館が韓国建築の特徴を再現した建物であることは、閔泳瓚が連れていた大工の力によると主張する。即ち、ミムレル伯爵による新しい韓国館が正統の韓国風の建築様式として建てられたことは、韓国側で派遣された大工が活躍した結果だと主張している⁽¹³⁾。

しかし、筆者が行った一次資料の検証を基に考えると、ジンとパクの主張には根拠が不十分な点や、論理的な飛躍だと思われる部分がある。韓国側が積極的に介入した根拠として彼らが提示している三つの点を持つ誤りを指摘したい。一つ目は、コラン・ド・ブランシーの報告書に韓国側が代表を派遣することが決まったと記されていることから、韓国側とフランス側の間で設計に関する協議が行われたと主張する部分への指摘である。根拠になった報告書には韓国側が事前に協議を行うことができる状態ではなかったと考えられる内容も含まれている。この報告書には、韓国側はフランス現地の状況が把握できず、建築物を完成させるために必要な予算や着手した作業をうまく進ませるための情報を、在フランス韓国公使代理であったシャルル・ルリナ (Charles Rouina) に求めていると記録されている⁽¹⁴⁾。現地の状況さえもうまく把握できていなかった韓国側が、代表になる人物を派遣することを決めただけで、事前に設計に関する協議を行ったと考えるのは無理があるだろう。

二つ目は、韓国から派遣された閔泳瓚が連れて行った労働者二人に関するものである。ジンとパクは、この二人が韓国建築に精通し

た大工であり、韓国側とフランス側の間ですでに設計に関する協議があつたから、韓国建築に詳しい彼らを同行させたと主張した。しかし、彼らに関する情報が登場したヴィダル少佐の報告書には、博覧会で働かせるための労働者 (ouvrier) であると書かれているだけで、彼らが本当に建築に関する技術者であつたと断定するには根拠が足りない。この二人がパリで行う仕事に関して、博覧会で働かせると記されているだけで、具体的にどのような仕事を担当する人々であつたのかは明示されていない⁽¹⁵⁾。もしこの二人が韓国建築に精通した大工であり、彼らにパビリオン建設を担当させたら、ヴィダルの報告書にもすでに示されたはずだろう。しかし、ヴィダルがこの二人に関して、ただ博覧会で働かせる労働者と記していることから考えると、彼らがパビリオン建設で活躍したと断定することは誤りである。しかも、閔泳瓚のパリ到着は1900年2月28日だと推測されるが、1900年4月12日に開催される万博までに韓国館を完工させないといけない状況であつたことを考慮すれば、時間的にもこの二人が建設過程において大きな役割を果たしたとは考えにくい。

三つ目は、韓国を代表する景福宮の勤政殿が韓国館のモチーフになったことを韓国側が企画過程に介入した根拠として提示した点に、論理的飛躍があるからだ。当時、万博に参加した国のパビリオンがその国を代表する建物をモチーフにして建てられることは、珍しいことではなかった。特に、アジアやアフリカ地域の国は、韓

国のようにフランス人が設計や建築を担当した場合が多く、それらの国を代表する建物がモティーフになったことも珍しくなかった。¹⁶⁾

〈表1〉に示されている国のほとんどは西洋諸国の植民地であるか、もしくは西洋諸国の影響の下にあった国であった。また、建築や設計の担当者が欧米人である場合が多い。そのような点から考えると、それらの国は万博への参加においても、パビリオンの企画や建設過程に主導的に介入したとは考えにくい。これらの傍証から判断して、国を代表する建物が韓国館のモティーフに採用された事実をもって韓国側が企画過程に主体的に関与したことの証拠とするのは、根拠不十分と言わざるを得ない。

このように、韓国側が新しいパビリオンの企画や設計の過程に積極的に参加したと考えるには難しい部分がある。まず、韓国側はグレオン男爵死後の状況がうまく把握できなかったため、ジンとバクの主張の通りに企画に関してフランス側と協議を行ったとは考えにくい。また、韓国側の代表である閔泳瓚がパリに到着した時期も万博開催の約一ヶ月前であったことから、定期的に考えて、彼や彼と同行した労働者二人が建築に深く関与した可能性は低いと考えられる。しかも、国を代表する建築物をモティーフにパビリオンを建てる構想は、当時の万国博覧会でも多くの事例があった。それなのに、韓国のパビリオンが韓国の宮殿をモティーフにしたことを根拠として、韓国側が介入したとみることも誤りだと考えられる。即ち、ジンとバクの研究には韓国館の建設過程において、韓国側の影響を

過大評価する問題点がある。筆者は、韓国館の構想や建設過程の主体をより正確に把握する必要があると考えている。それゆえ次の章では、グレオン男爵の韓国館企画と、ミムレル伯爵の企画を比べながら韓国館の構想や建設経緯に関して述べる。

2. グレオン男爵案とミムレル伯爵案の比較

先述のとおり、ジン・キョンドンとバク・ミナの研究では、グレオン男爵の企画は植民地主義意識の産物であったとみなす立場をとっており、逆に韓国の景福宮をモティーフにしたミムレル伯爵の企画を韓国政府の関与によるものと判断している。しかし、筆者は、グレオン男爵の企画が韓国の意見を排除したものでもないし、ミムレル伯爵の企画が韓国の意見をうまく受容した結果でもないと考えている。むしろ、どちらの企画においても、韓国側が積極的に意見を出すなどの協議を行ったわけではなく、フランス側が構想していた韓国館の結果として、景福宮の勤政殿をモティーフにした建物が建てられるようになったと考えている。この点を明らかにするため、本章ではまず、グレオン男爵が描いた元の設計図と実際に建てられたミムレル伯爵の設計図の比較から始めたい。その検討をとおして、グレオン男爵による企画が撤去され、ミムレル伯爵による企画が成り立つまでの過程を解明し、どのような部分が変わるようになったのかを明確にする。

2-1. グレオン男爵による設計図とミムレル伯爵による設計図
グレオン男爵による設計図は二つ存在する。〈図1〉の設計図はグレオン男爵が1899年3月12日に万博事務局に提出した設計図で、〈図2〉は同年の6月1日に提出した設計図である。グレオン男爵が1899年3月12日に出した1番目の設計図(図1)は、確かに韓国風ではなく、シノワズリ的な特徴が見られる建物が描かれている。特に、出入り口だとみられる扉が3層の塔のような形として描かれた点や、屋根の形などは、韓国の建築だとは思えないと、ジンとパクも指摘している¹⁷⁾。

2番目の1899年6月1日に出した設計図(図2)は、建物の外観が変わっている。しかし、この設計図も完璧に韓国様式の建物が描写されているものとはいえない。とはいえ、1回目の設計図で描かれた3層の塔のような形の扉や、屋根の角度が、韓国の建築様式として明らかに異質であったことと比べ、3層の塔の形をした扉も見られなくなり、屋根の角度もより緩やかに描かれている。また、韓国の象徴である太極文様(図3、4)がみられる点なども、前の計画よりは韓国風に近づいた設計図になったと考えられる。

2番目の設計図は、ジンとパクの研究では提示されていないものである。1番目の設計図だけでグレオン男爵の計画を評価するなら韓国風とは違うシノワズリ風だと言えるが、2番目の設計図ではジンとパクの研究でシノワズリ的だと指摘された要素がなくなった。また、太極文様が描かれていたことをみると、シノワズリ風の要素

が削除され、韓国的要素が入った計画であった。しかし、それだけで韓国建築の特徴が活かされている建物に変わったとは言えない。設計図に描かれている建物の様子がシノワズリ風から離れた設計に変わったとしても、韓国の特徴が表れているものだと断言できない。とはいえ、ジンとパクの研究の主張とは違い、グレオン男爵の2番目の計画には既に、韓国のイメージを意識した部分があった。

次に、ミムレル伯爵の設計図を分析する。ミムレル伯爵による設計図(図5)は、ベトナムで建築活動をしていたフランス人建築家であるウジェーヌ・フェレ(Eugène Feret)によって1900年1月16日に描かれた。この設計図では、景福宮の勤政殿をモチーフにしたものが描かれたことが分かる。韓国の宮殿を参照して設計されたため、グレオン男爵の設計と比べて韓国の建物をより正確に再現した建物となっている。ただし、敷地面積は、グレオン男爵の計画と比べて縮小された。

敷地が縮小された原因は明確ではないが、おそらくグレオン男爵が万国博覧会事務局と結んだ契約上の問題が原因になったと考えられる。1899年6月15日に作成された万国博覧会総裁委員とグレオン男爵の間の協約書には韓国館の構成に関する内容がある。この協約書には、韓国館は公式展示区画(*la partie officielle*)とピクチャレスクな区画(*la partie pittoresque*)に区分されることが示されている。公式展示区画には大きな韓国スタイルの建物が建てられ、政府からの収集品、現代や過去の芸術品、そして農業、鉱業、産業、商

業のすべての生産品が展示される空間として計画されると記されている。また、ピクチャレスクな区画は濟物浦（現在の仁川）の街を再現し、屋台やボールなどで構成され、アクロバットの公演なども計画されていたと記されているので、娯楽的な要素が加えられたエキゾチックな区画として計画されたと推測される。全体の面積は1368平方メートルで、その中の903平方メートルは公式展示区画、465平方メートルはピクチャレスクな区画になると書かれている。さらに、この協約書には、公式展示区画とピクチャレスクな区画に関する契約が分離されていたと推測される部分がある。この協約書の第9項には保証金やピクチャレスクな区画に割当地の賃貸料金が決められている。この項目でグレオン男爵が支払うべき金額は、保証金として7,000フランを、ピクチャレスクな区画に該当する465平方メートルを対象とした賃貸合計54,500フランを契約時に18,500フラン、1899年9月1日に18,000フラン、1900年3月1日に18,000フランに分けて支払うことが決められている。¹⁸しかし、この協約書に公式展示区画に関する賃貸は記されていない。つまり、公式展示区画は、ピクチャレスクな区画とは別の賃貸契約が締結されていた可能性が高いと考えざるを得ない。

公式展示区画の敷地を借りるための交渉が正確に書かれている文書は見つからなかった。しかし、1899年5月19日に作成された万国博覧会財政局の文書には、韓国敷地の準備工事や復旧の費用が

決定されたと書かれている。この文書には韓国の敷地を対象にした工事や復旧の費用として、1899年5月25日までに1,250フラン、1900年10月1日までに2,100フラン、合計3,350フランを支払うことが明示されている。¹⁹グレオン男爵死後に万国博覧会事務局がグレオン男爵の相続者たちに送った契約破棄による命令書の中で、この費用に関する内容も含まれていたことを見ると、この費用もグレオン男爵が支払う費用であつたと考えられる。グレオン男爵がピクチャレスクな区画を造成するために敷地を借りた契約より1か月程度前にこのような費用が算定されていたことは、グレオン男爵がピクチャレスクな区画の敷地を借りる以前、公式展示区画の敷地はすでに借りることが決められていたと推測できる。

筆者はグレオン男爵の死去により、ピクチャレスクな区画への賃貸料金を支払うことができなくなり、濟物浦の街並みを再現しようとした計画は自然に取り消されたと考える。1900年2月7日、フランス産業通信大臣によるグレオン男爵との契約破棄に関する命令書を見ると、グレオン男爵の相続人に保証金である7,000フランを払い戻し、支払われていなかった1899年9月1日分と1900年3月1日の分、そして復旧工事費用2,100フランを免除することが決められている。²⁰この命令書で記されている破棄の件はピクチャレスクな区画に関する契約である。復旧工事費用に該当する2,100フランの場合、韓国館の敷地全体に関する費用である可能性もあるが、これに関しては敷地が縮小された分の金額が新た

に決定され、ミムレル伯爵による計画につながっただろう。つまり、契約や契約破棄までの流れを基に判断すると、グレオン男爵による韓国館の企画の中で、ピクチャレスクな区画が取り消されたことは間違いないと考えられる。

公式展示区画のための敷地も縮小された。グレオン男爵による企画で、公式展示区画に該当する面積は903平方メートルであり、ミムレル伯爵による新しい企画によって建てられた韓国館の面積は570平方メートルである。しかし、韓国館全体の規模は縮小による変化があったとしても、展示空間自体の規模には大きく変化はなかったと考えられる。その根拠として、グレオン男爵の企画での空間の区分をあげて説明する。グレオン男爵による第1案の平面図(図7)には、公式展示区画に該当する903平方メートルのうち、展示空間の面積として617平方メートルが明示されている。これはミムレル伯爵の企画による韓国館の面積(570平方メートル)と比べ、それほど大きな変化はなかった。敷地が縮小されたとしても、展示空間としての面積は大きく縮小されていないことは、グレオン男爵の企画からミムレル伯爵の企画に変更される時点で、公式展示区画に関する計画に大きな変化はなかったからだと筆者は推測している。

続いてはグレオン男爵が死去する前までに工事が進んでいた建築物の撤去やその後のミムレル伯爵による計画案が成り立つまでの過程を詳しく検討しよう。特に、企画が変わっても残されていた公式

展示区画に対し、グレオン男爵の計画とミムレル伯爵の計画を比べ、パビリオンを建てる企画の根本的な発想は大きく変わっていないことを指摘したい。

2・2. グレオン男爵案の撤去からミムレル伯爵案の企画まで

ここまで検討した事実を踏まえると、グレオン男爵が死去する以前、すでに韓国館の工事が進行していたことには間違いない。この時点で工事が進んでいた建物はグレオン男爵の2番目の設計図によるものであったと推測される。グレオン男爵と万国博覧会事務局が1899年6月15日に締結した協約書の第3項には、建てられる建物が1899年3月12日に提出された計画書によるものであると書かれている。⁽²¹⁾ 協約書によると、1899年3月12日に提出された計画、つまり、グレオン男爵の1番目の設計図による建物が建てられる予定であったと結論できるだろう。しかし、グレオン男爵による2番目の設計図の上段に残されているメモ(図8)を見ると、2番目の設計図に従った工事が進んでいた可能性が強く推測される内容がある。このメモには、「処分を開始することが公認され、撤去の後⁽²²⁾に1番目のプロジェクトから2番目プロジェクトに交替することになった」とあり、最後にはA・Mと見られる署名が入っている。韓国館の工事に関わった人物の中、「A・M」を書名として使う人物としてはグレオン男爵死後の責任者であったアルマン・ミムレル(Armand Mimerel)である可能性が高い。しかも、設計図にこのよ

うなメモが書けるほどの責任を持った人で、計画の変更に関する内容が書かれたことも考えると、A・Mはグレオン男爵の後任であるミムレル伯爵を指すと見て間違いない。ミムレル伯爵がこのようなメモをグレオン男爵の2番目の設計図の上に書いたことを考えると、撤去される対象になった建築物はこの設計図によるものであっただろう。つまり、メモで指す1番目のプロジェクトはグレオン男爵による2番目の設計図によるもので、撤去の対象になった建築物は、2番目の設計図によって工事が進んでいたのである。

そうだとすると、もしグレオン男爵が計画の途中で没することがなかったら、この2番目の設計図の通りに韓国館が建てられたのだろう。先述した通り、2番目の設計図は1番目の設計図よりは太極文様が入るなど、韓国的要素が追加された計画であった。この計画の段階では、1番目の計画と比べ建物の外観だけではなく、空間の構成も変わったと考えられる。1番目の平面図(図9)や2番目の平面図(図10)を比較してみよう。1番目の平面図の場合、各空間の面積や空間の用途に対するメモが残されているため、公式展示区画とピクチャレスクな区画の区分が推測できる。濟物浦の街並みを再現する計画であったピクチャレスクな区画に割り当てられた465平方メートルは、街並み(Rue)に該当するところが200平方メートル、住宅(Maison)が建てられるところが184平方メートル、通り道の下部分(partie sous le chemin glissant)が72平方メートル、バル(Bar)が9平方メートルに分けられていることが設計

図から確認できる。その情報を基に平面図を確認すると、200という数字が書かれている真ん中の部分が街並み、それを囲んでいるいくつかの空間に184という数字が書かれている部分が住宅、その下に72という数字が書かれている部分が通り道の下、そして右上の9という数字が書かれている部分がバルだと推測できる。それだとすると、この部分以外の部分が公式的な部分として使われる敷地であると考えられる。けれども、1番目の平面図のような空間の構成になると、ピクチャレスクな区画を公式展示区画が囲むような形になるため、公式展示区画とピクチャレスクな区画が確実に分離されていた構成ではなかった。

続いて、2番目の平面図を検討したい。これは、1番目の平面構成とは異なる。領域を区分する内容は書かれていないため、空間の構成はわかりにくい。左側の領域と右側の領域が区別される形になっている。筆者は、この左側の領域が公式展示区画になり、右側がグレオン男爵の計画によるピクチャレスクな区画になったのではないかと考えている。右側のところが、平面図から見ると街並みのような形になっており、その周りに住宅のように見られる小さい空間が構成されている点から、ピクチャレスクな区画になると推測される。そうすると、左側の広い空間の上に建てられる建物は公式展示区画になり、展示空間として用いられるところであると推測される。上述した点を基に考えると、グレオン男爵による計画でも、韓国館の空間構成段階で展示空間としての公式展示区画とピクチャレ

スクな区画の区分が明確になっていたと考えられる。

先述したグレオン男爵による企画や設計図への分析を基に判断すると、グレオン男爵による企画の最初の段階から公式展示区画とピクチャレスクな区画は常に分けられていた。企画書や協約書に別の区画として記されており、敷地を借りる費用も両方の区画が別に算定されていた。また、グレオン男爵の設計図にも公式展示区画とピクチャレスクな区画の企画が区別されて書かれていたことから、両方の計画はすでに別のものとして進められていたと考えられる。それをもとに筆者は、グレオン男爵による企画からピクチャレスクな区画だけが取り消され、残されていた公式展示区画をミムレル伯爵が引き受けたと考えている。ジンとパクは、グレオン男爵の死去によって、韓国側とフランス側の協議を行った結果、景福宮の勤政殿をモチーフにした韓国風のパビリオンが建てられるように計画が変わったと主張していた。しかし、筆者は、グレオン男爵の企画から根本的なところは変わってないと考えている。

その根拠として、グレオン男爵による企画の段階から韓国の建物をモチーフにするという発想があったことを提示したい。1888年11月25日、グレオン男爵が初めに提出したとされる企画案から、公式展示区画とピクチャレスクな区画は分けられて計画されていた。この企画案に記されている公式展示区画に関する記録をみると、韓国政府による収集品、韓国近現代の芸術品、その他の生産品を展示する空間が公式展示区画として、「韓国皇帝の夏の宮殿をモチーフ

にした大きな建物」を建てる予定だと書かれている。⁽²³⁾この点から考えると、韓国の芸術品などを展示する空間に関する公式展示区画に韓国風のパビリオンを建てる計画はグレオン男爵による企画の段階でもすでに成り立っていたと推測できる。

また、グレオン男爵が没した後、韓国の敷地の分割や工事が進んでいた構造物への撤去に関して、万博の財政局と開発局が交した文書を見ても、韓国の公式的な展示空間に限定して言及されている。1900年1月29日、開発局から財政局に送られた構造物撤去を督促する文書には、元の韓国の敷地が3つに分けられるようになったことを知らせながら、そのうち長さ30メートルに該当する部分が韓国の公式展示空間 (Exposition officielle de la Corée) として割り当てられたと書かれている。⁽²⁴⁾

ヴィダル少佐の報告にも公式展示区画が残されるようになったと推測できる部分がある。ヴィダルの報告には、「ミムレル氏がその国の主な生産品を集めるための公式パビリオンを建設することに限定し、その事業を引き受けるようになると発表されました。」⁽²⁵⁾と記されている。つまり、グレオン男爵の企画の中で公式展示区画の部分をミムレル伯爵が引き受けたとヴィダルは認識していた。即ち、グレオン男爵の韓国館の企画がすべて取り消されたあと、改めて企画を行ったことではなく、公式展示区画だけをミムレル伯爵が引き受けた結果、勤政殿をモチーフにしたパビリオンが建てられたことになる。

以上のような経緯を踏まえて考えると、ジンとバクの主張通りにグレオン男爵のすべての企画が白紙に戻された後、韓国側とフランス側の協議により、全く新たな企画としてミムレル伯爵の案が採用されたと考えるのは誤りであると考えられる。むしろ、グレオン男爵による企画の段階から韓国風のバビリオンを建てる発想があったことをみると、公式展示区画に対する企画には根本的な変化はなかったと考える。ミムレル伯爵の新しい企画によって建てられた韓国館が、グレオン男爵の企画にも示されていた韓国の宮殿をモチーフにした建物であるからだ。つまり、公式展示区画に対する企画は変化なしに引き続き、グレオン男爵による企画の中、ピクチャレスクな区画だけがなくなったのがミムレル伯爵による企画になったと言える。

それにしても、設計図を比べると、違う形の建物が建てられ、大きな変化が行われたように見えるかもしれない。しかも、グレオン男爵による設計図に、勤政殿のような形状の建物が見つけられないため、この宮殿がモチーフになったと考えるのは難しい。グレオン男爵による1番目の設計図はもちろん、2番目の設計図でも勤政殿のような形状で描かれた建築物は見えない。つまり、グレオン男爵による企画では、韓国の宮殿をモチーフにするという漠然とした計画に留まっていた。しかし、ミムレル伯爵が責任者になってから、勤政殿をモチーフにした設計が行われ、韓国の宮殿をモチーフにすると言う企画が具体的になったのである。

けれども、結果的に景福宮の勤政殿をモチーフにした韓国館が建てられたことは、グレオン男爵の企画でも明示されていた「韓国皇帝の宮殿をモチーフにした韓国風の建物」という発想が起点だ。結局、韓国の宮殿をモチーフにしてバビリオンを建てるという企画に根本的な変化がなかったとすれば、グレオン男爵の企画からミムレル伯爵の企画に変わる段階で、韓国の介入がなくてもフランス側の判断によって勤政殿がモチーフとして決められた可能性があったと言わざるをえない。次の章では、当時のフランス人たちに景福宮の勤政殿はどのように認識されていたのかの説明と、韓国側がバビリオンの企画や建築過程で積極的に介入することができなかった理由の解明を行う。それを通して、実際に建てられたこのパビリオンのモチーフを決定した主体がフランス側であったことを明確にしたい。

3. 韓国間のモチーフの決定の主体

まず、フランス側の記録で、韓国館のモチーフになった景福宮の勤政殿に関する言及のあるものを検討しよう。筆者が見つけたことのできた一番古い言及はシャルル・ヴァラ (Charles Varat) によるものである。シャルル・ヴァラは1888年、6週間韓国を旅行し、その際の見聞録を「韓国旅行 (Voyage en Corée)」というタイトルで旅行関連雑誌『世界旅行 (Le tour de monde)』の1892年号に寄稿した。この記事には、韓国王の宮殿という注と共に、景福宮の勤政

殿が挿絵として入っている。⁽²⁶⁾ (図11) 少なくとも、シャルル・ヴァラの記事が発刊された1892年からは、韓国王の宮殿である景福宮の建物の一つとして勤政殿の姿が知られ始めたといえるだろう。

次は、1章でも述べたフランス側で韓国の万国博覧会準備委員会の一員であったモリス・クランの記録である。彼が万国博覧会の韓国館に対する感想や韓国での経験談を書いた『ソウルでの思い出 (Souvenir de Seoul)』には、先述した通りに韓国館が韓国皇室の宮殿をモチーフにしたという諸術とともに、景福宮の勤政殿の写真が乗せられている⁽²⁷⁾ (図12)。この書物は万国博覧会が開催されている途中である1900年に出版されたものであるが、勤政殿を写した写真資料はおそらくそれ以前に撮られたものだと考えられる。

つまり、韓国館が企画される時点において、フランス側の委員会の中には、景福宮の勤政殿が韓国を代表する建物であるという認識がすでにあつた可能性が高い。だとすれば、韓国館のモチーフとして景福宮の勤政殿が選ばれたことは、韓国が企画過程で関与した結果というよりも、フランス側の選択によるものだったのではないだろうか。韓国館の最初の企画ではグレオン男爵自身が、グレオン男爵死後のミムレル伯爵による企画では建築家ウジェーヌ・フェレが設計図を描いた。両方ともフランス人によって設計図が描かれたことから、設計の主導権はフランス側にあつたとみるのが正しいと考えられる。

グレオン男爵が1898年11月25日に万国博覧会事務局に出した

企画書には、すでに韓国の宮殿をモチーフにしたパビリオンを建てる企画が書かれている。2章でも言及したが、この企画書には公式展示区画を「正統皇帝 (高宗) の夏の宮殿のようなスタイル」の大きなパビリオンとして構成するように書かれていた。⁽²⁸⁾ また、1899年7月6日にグレオン男爵と万国博覧会事務局が締結した協約書にも、公式展示区画は「韓国スタイルの大きなパビリオン」に構成するように示されている。⁽²⁹⁾ つまり、グレオン男爵の企画の段階でも、韓国の宮殿をモチーフにするパビリオンを建てることは決められていたと考えられる。

しかし、グレオン男爵の企画書に書かれている「正統皇帝 (高宗) の夏の宮殿」が景福宮の勤政殿を念頭にしたものとは考えにくい。むしろ2章で述べたとおりに、グレオン男爵の1番目の設計図に描かれた建物の外観は韓国風ではなかったし、平面図での空間構成も公式展示区画に該当する部分がピクチャレスクな区画に該当する部分を囲んだような形になっていた⁽³⁰⁾ので、その形は勤政殿とは異なるものであつた。また、2番目の設計の平面図が、筆者が主張した通りに、左側の領域が公式展示区画で、右側がグレオン男爵の企画によるピクチャレスクな区画になったとしても、設計図上に描かれた建物の様子が勤政殿をモチーフにしたとは見えない。それゆえ、グレオン男爵の企画で勤政殿をモチーフにしたとは言えない。

しかし、グレオン男爵の企画書や契約書で、すでに韓国の宮殿を

モティーフにした展示空間が構想されていたことを裏付ける内容が示されていたことは、フランス側が企画の段階でもともと韓国の宮殿をモティーフにしようとした証左であると推測できる部分である。これは、グレオン男爵死後、新しい企画で景福宮の勤政殿をモティーフにしたパビリオンが建てられることになったのが、必ずしも韓国側の介入によるものではない根拠にもなる。

当時の状況をみても、韓国側が企画の段階でフランス側と積極的に意見を交換できるような立場になかったことは明らかである。まず、財政的な問題があったからだ。1章でも述べたとおり、フランスが韓国に万国博覧会への参加意思について最初に尋ねた時から、韓国の財政的な問題を支援しなければならないことをフランス側も認識していた。³⁰ グレオン男爵や彼の後任であるミムレル伯爵が韓国館のために財政的な支援、いわゆるスポンサーの役割をするために選ばれたことを考えるなら、企画段階から韓国には財政的な問題があったのだろう。フランス側に財政的な面を大きく依存していた韓国側が、自らの意見が多く反映されるような協議を行ったとは考えにくい。

また、韓国の外交行政にも問題があった。この時期、フランスで韓国の外交業務を担当した者はシャルル・ルリナで、1897年パリ駐在韓国名誉総領事に任命された。³¹ 彼はパリ万博で韓国側の準備委員会に事務委員として所属していたし、グレオン男爵が死去した後にも韓国政府は彼にパリの状況を尋ねていた。³² このような点をみ

ると、パリ万博で韓国館の企画が行われていた時期にもルリナは韓国の外交業務を担当する役割を果たしていた。しかし、この時期韓国から外交業務の責任者として派遣された人物はいなかったと推測される。グレオン男爵による企画書が書かれ、万博の準備が始まった1898年から万博が始まる1900年までの間、韓国政府により公使として任命された人物は3人いる。³³ だが、韓国館の建築が行われていた時期に実際にフランスに赴任した人物はいない。任命された3人のなか、2人はそれぞれの理由でフランスに赴任することができなかったことが推測できる記録が残されている。1898年5月24日にフランス公使に任命されたと記されている尹容植は、父親の病気を理由でフランスに行けず、1888年8月8日（新暦9月23日）、高宗に辞職を要請した。³⁴ 尹容植の後任として任命された閔泳敦は、自分が適任ではなく、出国もできずに6ヶ月を悩み続けた後、1889年2月3日（新暦3月14日）、高宗に辞職を要請した。³⁵ 3人目に任命された李範晋はフランスに赴任はするが、パリに到着したのは1900年5月で、すでに万国博覧会が開催された後であった。³⁶ つまり、韓国館が企画された段階で、フランスに在留していた韓国人公使はいなかったことになる。ルリナが韓国の外交業務を行っていたとしても、韓国から派遣された外交官でもなく、フランス人である彼が韓国の意見をうまく代弁したとは考えにくい。即ち、韓国は公使さえも派遣できなかった状況であり、万国博覧会に関する企画への協議が十分に行われたと考えることは難しいだろう。

これらの情報を総合して考えてみると、筆者は韓国館のモチーフが韓国の宮殿になったことは、韓国側の意見が反映された結果ではなく、フランス側によって決められたものだと考える。1892年時点でシャルル・ヴァラの旅行記事により韓国館のモチーフになった勤政殿がフランスに紹介されたことで、フランス側の関係者たちにも韓国を代表する建物として勤政殿が認識されていた可能性はある。また、平面図で見られる形が韓国の宮殿の形とは違うものであるとしても、グレオン男爵の企画で韓国皇帝の宮殿をモチーフにしたパビリオンを建てようとした発想があったということは、韓国側の介入がなくてもフランス側がすでに韓国の宮殿をモチーフにしようとしていたことを裏付ける証拠になる。また、財政面・行政面においてフランス側からの援助に頼らざるを得なかった韓国側は、パビリオンのモチーフの設定に関して積極的に意見を出せる立場にはなかった。

結論として、1900年パリ万国博覧会の韓国館は、グレオン男爵の企画が完全に撤回・変更されたものではなく、男爵の当初の企画にも盛り込まれていた建物を公式的な展示空間として引き継ぐとする発想が具体化された結果であったと、筆者は考える。韓国の万国博覧会参加のために活動したフランス側の人物もすでに写真などの資料や自分の見聞を通して、景福宮の勤政殿が韓国を代表する建物であるという認識があった。また、韓国側は韓国館の企画段階で、財政や外交行政問題により、深く介入できる立場でもなかった。

このような背景状況を考慮すると、グレオン男爵による企画からミムレル伯爵による企画に変わる段階でも、韓国側の意思よりはフランス側の意思がより強く反映されたと判断できる。その結果、ミムレル伯爵による企画でも、すでにグレオン男爵による企画の段階から構想されていた韓国の宮殿をパビリオンのモチーフにするという根本的な発想は引き継がれるようになった。それによって、フランス側により、韓国を代表する宮殿として認識されていた景福宮勤政殿をモチーフにするという計画が具体的に立てられた。即ち、ミムレル伯爵による最終企画で、韓国館のモチーフの決定は、韓国側の介入によるものではなく、フランス側がすでに念頭にいた構想の具体化によるものだったのだ。

韓国館建設の意義

本稿で述べてきたように、韓国側は韓国館の企画や建設過程では大きな役割を果たすことができなかったと考えられる。グレオン男爵による最初の企画では、韓国の宮殿がモチーフとして設定されていたも、設計図に描かれた様子はその形が伝統的な韓国の建築とは異なるものであった。グレオン男爵が死去した後、韓国側は万国博覧会を担当する代表人物である閔泳璽を派遣することは決めたが、実際に彼がパリに到着したのは2月28日であり、時間的に企画に参加することはできなかったと考えられる。また、国を代表する建物をパビリオンのモチーフにしたことが、韓国側との協議の結果で

あることも確実ではない。むしろ、最初の企画からすでに韓国の宮殿をモチーフにする構想は出されていた。最初の企画者であったグレオン男爵の死去や、敷地の縮小、設計の変更などがあったが、そのすべての業務をフランス人が主導したことを考慮すると、フランス側によってモチーフが決められた可能性が高い。つまり、1900年パリ万国博覧会における韓国館の建設は、フランス側の主導のもとに行われたものであり、韓国側はパビリオンの設置において多くの部分をフランスに依存していた。

パビリオンの建設はフランス側によって主導されたものだととしても、韓国の宮殿をモチーフにした韓国風の建物がヨーロッパで最初に建てられたことにはそれなりの意義がある。モリス・克蘭が書いた韓国館に関する感想の中には、韓国や日本に伝えられた建築様式の中には、中国発祥のものが少なからず見受けられるとはいうものの、韓国の建築はその両国、つまり中国と日本とも異なる固有の美しさを有している、という点について評価が述べられている⁽³⁾。シノワズリやジャポニズムという波及力をもっていた両国の間にある国の文化が、それらと比べられる魅力をもっていると評価され始めたことの証であると言える。結果的にはジャポニズムのように流行することはできなかったものの、韓国の文化が西洋諸国において中国や日本とは別のものとして認識され始めるきっかけにはなったのである。

註

(1) この時代を称する言葉としては開化期、舊韓末などがあり、国を称する言葉としては朝鮮や大韓帝国が混用されている。日本に併合された後はまた朝鮮と称される場合が多い。なので、韓国の名称は厳密に1897年から1910年までの大韓帝国を指す言葉であるし、その前後は朝鮮、その時代は大韓帝国として称することが正しい。だが、本稿では便宜上、年代に関係なくすべての名称を大韓帝国の略称である韓国で用いることにする。

(2) Jin Kyong-don, Park Mi-na, "A Study on the Construction Process and Design Characteristic of Korean Pavilion in Paris 1900 Exposition Universelle in Korean Modern Architecture", *Korean institute of interior design journal v.17 n.3*, Korean institute of interior design, 2008. 06, pp.3-14; Jin Kyong-don, Park Mi-na, "A Study on the Construction Process and Architectural Characteristics of the Korean Pavilion in 1900 Paris Universal Exposition - Focused on the Plan of Korean Pavilion designed by Comte de Mirmel, the General Affairs Committee -", *Korean institute of interior design journal v.17 n.4*, 2008.08, Korean institute of interior design pp.11-22.

(3) 国史編纂委員会(국사편찬위원회), 「1893年5月7日、在韩国フランス公使からフランス外務大臣への報告」『韓国近代史資料集成4・韓佛関係資料(한국근대사자료집성4:한불관계자료)』, 2010年, 韓国国史データベース(한국사 데이터베이스) http://dbhistory.go.kr/d/hk_004_0020_0010 (accessed 2024. 07. 04)。「しかし、私たちが考慮すべき重要な点があります。韓国には豊富な商品がありますが、財政が安定されていないため、お金にくらべ熱意が多いです。なので、アメリカがそうしたように、収集品を購入し、物品や人をパリに移動させるための財政的支援が必要になります。閣下におかれましては、1889年の展覧会のカタログを郵便でお送りいただければ幸いです。私は仁田(高宗)殿下もそれに関心をお持ちになると確信

じつと⁴⁴。(Seulement, nous aurons à tenir compte d'un facteur important : la Corée est très riche en produits, mais son Gouvernement grâce au désordre de ses finances est plus riche en bonne volonté qu'en argent. Il y aurait donc à faire comme l'Amérique, à l'aider pécuniairement, soit par l'achat des collections, soit en facilitant le transport des marchandises et des personnes qui seraient dirigées sur Paris. Je serais heureux si Votre Excellence pouvait faire adresser à ce poste quelques catalogues illustrés de l'Exposition de 1889, je suis sûr qu'ils intéresseraient vivement S.M. L.J.H.)」

- (4) 国史編纂委員会「1898年8月5日「在韩国フランス公使館からフランス外務省通商部への報告」」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0140. (accessed 2024. 08. 22) 「コナン・ムーランシー氏は「韓国政府がドロー・ム・グレン男爵を担当者として選択したと知らされた。パリ駐在韩国総領事であるルリナ氏からの情報によると、グレン男爵が設置費用を負担すると提案したらしいです。なので、5月23日の命令書により、グレン男爵が韓国の担当者として任命されました」。(M. Collin de Plancy me fait connaître que le choix du Gouvernement Coréen s'est arrêté sur le Baron Delort de Gléon qui, d'après les indications transmises par M. Roulina, Consul Général de Corée à Paris, aurait proposé de prendre à sa charge les frais d'installation de la secteur coréenne. Par un décret en date du 23 mai, M. Delort de Gléon a été nommé délégué de la Corée.)」

- (5) 国史編纂委員会「1896年11月18日「在韩国フランス公使からフランス外務大臣への報告」」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0300. (accessed 2024. 07. 04) 「韓国政府は始めた工事を続ける意思を表明しました。韓国政府はパリ駐在総領事に必要な最小限の経費を把握やその他に必要な情報を確認するため電報をしました。一方、フランス委員会の副委員長がもうすべフランスに出発する予定です。(Le Gouvernement Coréen manifeste intention continuer travaux

commencés : il télégraphié à son consul général à Paris pour connaître somme strictement indispensable et avoir tous renseignements utiles. D'autre part, vice président de la commission à Séoul partira prochainement pour la France.)」

- (6) 国史編纂委員会「1900年1月12日「万国博覧会事務局からパリ駐在韩国総領事ルリナへの通知」」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0340. (accessed 2024. 07. 04) 「私は今月8日の公文により、大韓帝国の外務大臣があなたに送った、シムレル伯爵を1900年万国博覧会韓国支部の総務大員として任命したという手紙の内容に関し、私の報告があったことを謹んで申し上げます。(J'ai l'honneur de vous accuser réception de la lettre par laquelle vous avez bien voulu porter à ma connaissance que, par dépêche du 8 de ce mois, S.E.M. le Ministre des Affaires Etrangères de l'Empire de Corée vous a avisé de la nomination de M. le Comte Mimérel en qualité de Commissaire Général de la Section Coréenne à l'Exposition Universelle de 1900.)」

- (7) Jin Kyong-don, Park Mi-na, 2008. 08. pp.11~22
- (8) 国史編纂委員会「1896年11月18日「在韩国フランス公使からフランス外務大臣への報告」」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0310. (accessed 2024. 07. 05) 「その情報（韓国館建設のために必要な作業や経費に関する情報）がソウルに着くと、韓国委員会の副委員長である閔泳瓚殿が工事の完了や支部の組み立てのためのルリナ氏と協議する目的でパリに出発した」。(Des que ces renseignements seront parvenus à Séoul, le Vice-Président de la Commission, Monsieur Min Yong-Tchan, partira pour Paris, en vue de se concerter avec Mr Roulina pour l'achèvement des travaux et l'organisation de la section.)」

- (9) Jin Kyong-don, Park Mi-na, *Korean institute of interior design journal* v.17 n.4, 2008. p.16
- (10) 国史編纂委員会「1900年2月1日「フランス軍少佐ヴィタルが

らフランス防衛省への報告」 http://dbhistory.go.kr/id/hk_004_0020_0390 (accessed 2024. 07. 05) 「閔泳瓚殿は自分と共に博覧会に働かせた二人の韓国人労働者を連れて行きます。(Le Prince Min-Young-F'chan a emmené avec lui, deux ouvriers coréens, qui doivent travailler à l'Exposition.)」

(11) Jin Kyong-don, Park Mi-na, 2008, 08, p.17

(12) Courant, Maurice, *Souvenir de Seoul, Corée : 1900, 1900*, (Paris), pp.5~6

(13) Jin Kyong-don, Park Mi-na, 2008, 08, pp.18~19

(14) (注8) 「とはいえ、彼らは何が行われていたのかを知らないままなので、外務大臣は皇帝の命によってパリ駐在総領事であるルリナ氏に電報を送り、自分に建築物を完成させるための必要な予算や着手した作業をうまく進ませるためのすべての有用な情報を詳細な報告書を通じて知らざることを依頼しました。(…mais comme on ignorait ici ce qui avait été fait, le Ministre des Affaires Etrangères a, sur les ordres de l'Empereur, télégraphié à Mr Roulina, Consul-Général à Paris, en le priant de lui indiquer le crédit qui serait strictement indispensable afin de terminer les constructions et de lui transmettre par un rapport détaillé toutes les indications utiles qui permettraient de mener à bien l'oeuvre entreprise.)」

(15) (注9)

(16) Quantin Albert, *L'Exposition du Siècle - 1900, 1900*, Le monde Moderne (Paris): Lemercier Guide, *exposition universelle 1900 catalogue officiel illustré de l'exposition décennale des beaux-arts de 1889 à 1900*, 1900, Ludovic Baschet (Paris): Exposition internationale, *Paris exposition 1900 : guide pratique du visiteur de Paris et de l'exposition*, 1900, Hachette (Paris): Gers Paul, *En 1900*, 1901, Éd Crété Imprimeur (Corbeil)

(17) Jin Kyong-don, Park Mi-na, p.14

(18) 国史編纂委員会「1896年7月6日」万国博覧会総業委員とメ

オン男爵間に締結した協約書」 http://dbhistory.go.kr/id/hk_004_0020_0250 (accessed 2024. 07. 08) 「第1項 協議の目的 我が国はドロ・ド・グレオン氏個人に、以下の2項によって決められた空間を譲渡する。この空間は博覧会の空間内に確保され、韓国の博覧会が進行されるすべての期間内に利用される。この博覧会は公式的なものと、ビクチャレスク的でアトラクシオンのものから構成される。第2項 賃貸空間 ドロ・ド・グレオン氏に譲渡された空間はこの協約書に添付された地図の緑の部分になる。それは1,368平方メートルで、その中で903平方メートルは公式展示区画に割り当てられ、465平方メートルはビクチャレスク的な区画になる。公式展示区画は韓国型の大きなバビリオンで構成され、政府による収集品、過去や現代の芸術品、農業、鉱業、産業、商業の生産品が入る。:(中略):」

第9項 使用料 アトラクシオンの区画として割り当てられた部分の賃貸は、博覧会全期間54,500フランとして決める。即ち、425平方メートルは100フラン、そして40平方メートル(ホール)は300フランになり、次のように3回に分けて支払うことに決定する。現在の署名をした時

1896年9月1日	……………	18,000
1900年3月1日	……………	18,000

(ARTICLE PREMIER. Objet de la convention. L'État concède à M. Delort de Gléon, en son nom personnel, un emplacement désigné à l'article 2 ci-après, à charge d'y organiser, dans l'enceinte de l'Exposition, et d'y exploiter pendant toute sa durée l'exposition de la Corée. Cette exposition comprendra deux parties : l'une, officielle ; l'autre, pittoresque et d'attractions.

ART. 2. Emplacement loué. L'emplacement concédé à M. Delort de Gléon est figuré en vert sur le plan général annexé à la présente convention. Il comprend une superficie totale de mille trois cent soixante-huit mètres carrés, dont neuf cent trois sont réservés à la partie officielle et quatre cent soixante-cinq à la partie pittoresque.

La partie officielle se composera d'un grand pavillon, style coréen, qui renfermera les collections du gouvernement, celles d'art moderne et rétrospectif et tous les produits de l'agriculture, des mines, de l'industrie et du commerce. ...

ART. 9. Redevance. Le prix de location de la partie réservée aux attractions est fixé, pour toute la durée de l'Exposition, à la somme de cinquante quatre mille cinq cents francs (54,500 francs), soit : quatre cent vingt-cinq mètres carrés à cent francs et quarante mètres carrés (bar) à trois cents francs, payable en trois termes comme suit :

A la signature des présentes 18,500 francs.
Le 1er septembre 1899 18,000
Le 1er mars 1900 18,000
TOTAL ÉGAL 54,500 J

(19) 国史編纂委員会「1899年5月19日、博覧会参加国に対する工事費用支払命令書」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0220 (accessed 2024. 07. 10) 「命令 1. 以下に指定されている許可敷地にあるベンヤン・エ・ブルス広場の、整備や復旧の費用は次のように決められる。 5. 韓国の敷地」以下の日付に3. 36フランを支払ったこと :

1899年5月25日 1. 260フラン
1900年10月1日 2. 100フラン
合計 3. 36フラン

(Arrêté : Art. 1er - Les frais de préparation et de remise en état des terrains du Champ de Mars, sur l'emplacement des concessions ci-dessous désignées, sont fixés de la manière suivante :
5. Concession de la Corée, à la somme de Trois mille trois cent cinquante francs (3,350f) payable aux dates ci-après :
le 25 mai 1899 1,250f
le 1er octobre 1900 2,100f

Total 3,350f J

(20) 国史編纂委員会「1900年2月7日、グレオン男爵が締結した韓国館契約破棄による命令書」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0400 (accessed 2024. 07. 10) 「命令 1. 1900年万国博覧会総業委員とドロ・ド・グレオン氏の間に1899年7月6日付で締結された契約を解約する。

命令 2. ドロ・ド・グレオン氏の相続人たちに、最後の二つの期間に該当する債務を免除する。その一つは1899年9月1日満期のもので、まだ支払われてない18,000フランと、もう一つは1900年3月1日満期の同じ金額(18,000フラン)と、譲渡された敷地の準備及び復旧の2番目の時期に該当する2,100フランである。命令 3. 相続人たちはすでに建てられている建築物を速やかに撤去させ、敷地を本来の状況に復旧させなければならない。

命令 4. 1899年8月18日、供託所デボ・エ・コンシニャン銀行に支払った保証金7,000フランの金額の払い戻しを許可する。
命令 5. 1900年万国博覧会総業委員はこの命令の執行の責任を負う。

(ARTICLE 1 Le contrat en date du 6 juillet 1899 passé entre le Commissaire Général de l'Exposition universelle de 1900 et M. le Baron Delord de Gleon est résilié.

ARTICLE 2 Remise est faite aux héritiers de M. Delord de Gleon des deux derniers termes de la redevance dont l'un de dix huit mille francs, échu le premier Septembre 1899 et non encore versé et l'autre de même somme (18,000 frs) à l'échéance du premier Mars 1900 ainsi que de la somme de deux mille cent francs représentant le deuxième terme des frais de préparation et de remise en état des terrains concédés.

ARTICLE 3 Les héritiers devront faire procéder sans délai à la démolition des constructions déjà élevées et remettre les terrains en leur état primitif.

ARTICLE 4 Est autorisé le remboursement de la somme de sept mille francs versée à titre de cautionnement définitif à la Caisse des Dépôts et Consignations le dix huit Août 1899.

ARTICLE 5 Le Commissaire Général de l'Exposition universelle de 1900 est chargé de l'exécution du présent arrêté.)」

(21) 「(注18)「第3項 全体的プロジェクト 建つられる建築物の全体計画は1899年3月12日に総事務局に提出されたものとする。(ART. 3. Projets d'ensemble Les projets d'ensemble des constructions à édifier sont ceux qui ont été remis au Commissariat général, le 12 mars 1899.)」

(22) 「a reçu un commencement a execution a ete demoli puis remplacé par en 1er projet - 2me projet」

(23) 国史編纂委員会「1898年11月25日「クレオン男爵が万国博覧会開発局長に送った企画案」」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0200 (accessed 2024. 07. 10) 「この区画は二つのパートに構成されます。一つは公式展示区画でもう一つはピクチャレスティックでアトラクション的な区画です。公式展示区画には大きなバビリオン(La 王皇帝(高宗)の夏の宮殿のようなスタイル)を建て、政府によるコレクション、過去や現代の芸術コレクション、農業、鉱業、産業、商業などの生産品を展示します。この展示は、ソウルにいる公使コラン・ド・プランシー殿による積極的な支援が期待され、とても大事で興味深くって完璧なものになると考えられます。二つ目の区画は韓国の賑やかな街並み、濟物浦の街を再現したもので、多くの現地(韓国)人が居住し、中には商品を売り、製造している人々もいます。また、カフェや屋台、曲芸師などがある多様なタイプの異国的な種類や慣習を持つ人々が多く住む街になります。(Cette Section comprendrait deux parties: l'une officielle, l'autre pittoresque et d'attraction. La partie officielle se composerait d'un grand Pavillon (dans le style du Palais d'été de l'Empereur Li-Hi), qui renfermerait les collections du Gouvernement, les collections d'art moderne et rétrospectif, et tous

les produits de l'agriculture, des mines, de l'industrie, du commerce, etc... etc... Cette exposition pour laquelle nous savons pouvoir compter sur le concours très actif de notre Ministre à Séoul. Monsieur Collin de Planey, promet d'être très importante, très curieuse et très complète. La seconde partie de la Section représenterait un coin animé de la Corée, une rue à Tchémulpo avec ses maisons et bâtiments habités par des familles nombreuses et d'origine authentique vendant, et quelques-unes même fabriquant leurs produits, rue très animée avec sa maison de thé, avec ses forains et ses acrobates en plein air, etc... etc... avec tous ses habitants aux types et aux coutumes si diverses et si étranges)」

(24) 国史編纂委員会「1900年1月29日「万国博覧会開発局長から財政局長への通告」」http://db.history.go.kr/id/hk_004_0020_0380 (accessed 2024. 07. 08) 「下記の開発局長は、同僚である財政局長に韓国に割与された場所が三つに分けられたことを謹んで通告する。

1. セース川から一番遠く離れた長さ30メートル空間は韓国の公式展示区画として割り当てられる。
2. 長さ15メートルの建築物に対しては、フランスSavonnerieの展示会付属の別館として譲渡される。
3. 残りの空間はBakerに譲渡されるが、道路設備に間違いがあったため、その場所には居られない。この建物の配置や建築に対しては何の費用も請求しない。

(Le Directeur Général de l'Exploitation, sousigné, a l'honneur d'informer son collègue M. le Directeur des Finances, que l'emplacement précédemment accordé à la Corée se trouve actuellement divisé en trois parties distinctes:

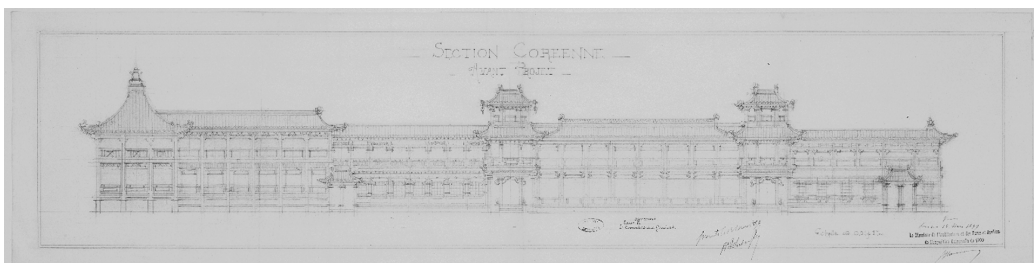
1. Dans la partie la plus éloignée de la Seine, un espace de 30 mètres de long est affecté à l'Exposition officielle de la Corée.
2. Puis un pavillon de 15 mètres de longueur est concédé comme annexe à l'Exposition de la Savonnerie française.

3. Enfin l'espace à la suite est affecté à la concession Baker, qu'une erreur d'implantation des voies de Manutention oblige à ne pas laisser subsister sur son emplacement actuel. Rien ne sera d'ailleurs chargé aux dispositions et constructions de ce bâtiment.)」
- (25) (注10) 「on annonce que M. MIMEREL reprendrait l'affaire à son compte en la limitant à la construction du pavillon officiel, destiné à renfermer simplement les principaux produits du pays.」
- (26) Varat Charles, “Voyage en Corée”, *Le Tour du Monde* mai et juin. 1892. Hachette (Paris). pp. 289-368
- (27) Courant, 1900
- (28) (注23)
- (29) (注18)
- (30) (注6)
- (31) 国史編纂委員会, 「1897年6月18日、ルリナ氏をパリ駐在韓国名誉総領事と任命す」, http://db.history.go.kr/id/hk_004_0010_0140 (accessed 2024. 08. 05)
- (32) (注5)・(注8)
- (33) 高麗大学アセア問題研究院 (고려대학교 아세아문제연구소), 『旧韓国外交文書 22』, 2010年, 高麗大学アセア問題研究院, p.1042-1043
- (34) 『承政院日記』「高宗35年8月8日〔新曆9月23日〕」, 1898年, <https://sjw.history.go.kr/id/SJW-K35080080-00500> (accessed 2024. 07. 26)
- (35) 『承政院日記』「高宗36年2月3日〔新曆3月14日〕」, 1899年, <https://sjw.history.go.kr/id/SJW-K36020030-00400> (accessed 2024. 07. 26)
- (36) 国史編纂委員会, 「1900年5月12日、李範晋公使のパリ到着報告とフランス大臣への面談要請(이범진 공사의 파리 도착 보고와 프랑스 장관 면담 요청)」, http://db.history.go.kr/id/hk_004r_0010_0260 (accessed 2024. 07. 26)
- (37) Courant pp.7~8

〈表〉1900年パリ万国博覧会で国を代表する建物をモチーフにして建てられたパビリオン（西欧諸国は除外）

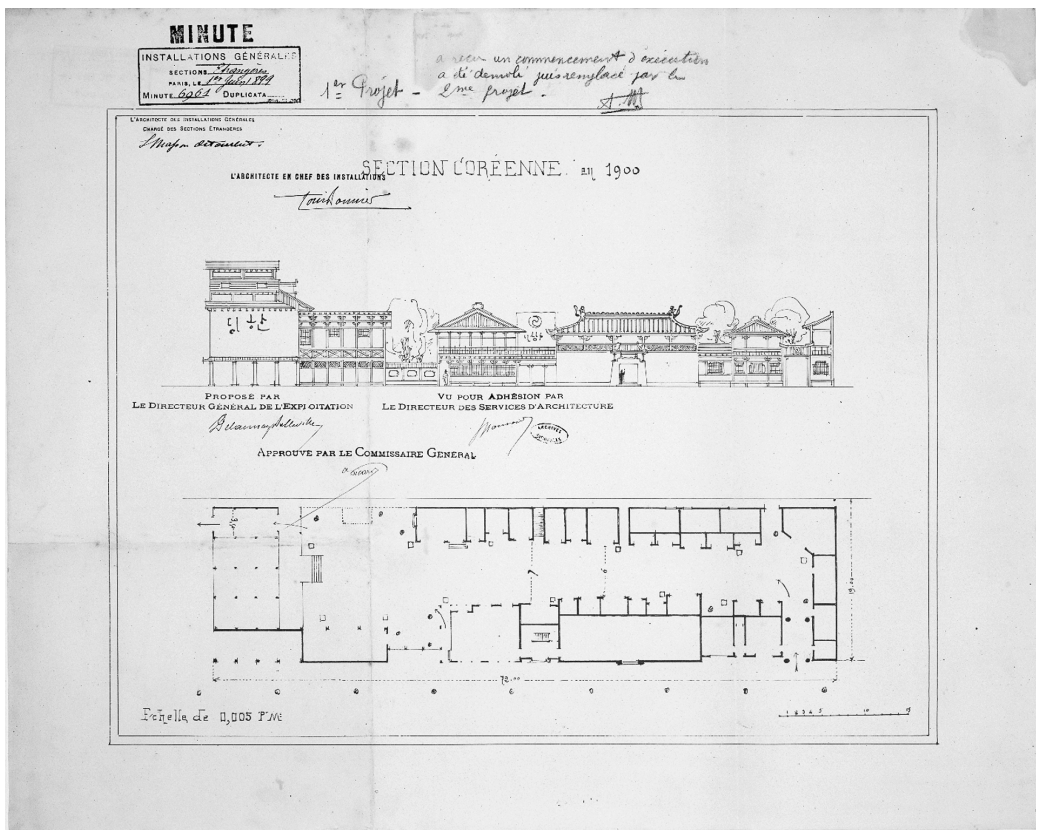
国	設計者又は建築担当	モチーフにした建物
韓国	Eugene Ferret	景福宮勤政殿
エジプト	Marcel Dourgnon	デンドゥール神殿（Temple of Dendur）
中国	Louis Masson-Détourbet	頤和園の門、紫禁城の中の建物の一つ
インド（ネーデルラント領）	J.Z.Stuten	サリ寺院
アルジェリア（フランス領）	Albert Ballu	ハッサン・パシャ・モスク（Hassan Pasha Mosque）、シディ・ボーメディン（Sidi Bou-Médine）モスクの塔（トレムセン）
インドシナ街—Palais des Produits	MM. Maréchal et Decron	コーチンチャイナのパゴダ
インドシナ街—Palais des Arts	M. du Houx de Brossard	コロアの宮殿（Palais de Coloia）（トンキン）
インドシナ街—Le Pavillon des Forêts	M. du Houx de Brossard	アンナン富豪の邸（Maison de riche Annamite）（トゥーダウモト）
インドシナ街—Le Pnom	Alexandre Marcel	パゴダとピラミッド（la pagode et les Pyramides）（プノンベン）
スダンとセネガル		ニージェル川堤にあるモスク形の宮殿
チュニジア	M.Saladin	シディ・マクルフ・モスク（Mosque of Sidi-Makhlouf）、サファクサ・モスク（Mosque of Sfax）、シディ・マフレス・モスク（Mosque of Sidi-Mahrès）
トルコ	Dubuisson	カーイトバーイのモスク（Mosque of Kait-Bey）
ペルシア	Philippe Mériat	マデルーシャリマドラサ（Médressé Mader-Chali）

出典：Quantin Albert, *L'Exposition du Siècle – 1900*, 1900, Le monde Moderne (Paris); Lemerrier Guide, *exposition universelle 1900 catalogue officiel illustré de l'exposition décennale des beaux-arts de 1889 à 1900*, 1900, Ludovic Baschet (Paris); Exposition internationale, *Paris exposition 1900 : guide pratique du visiteur de Paris et de l'exposition*, 1900, Hachette (Paris); Gers Paul, *En 1900*, 1901, Éd Crété Imprimeur (Corbeil)



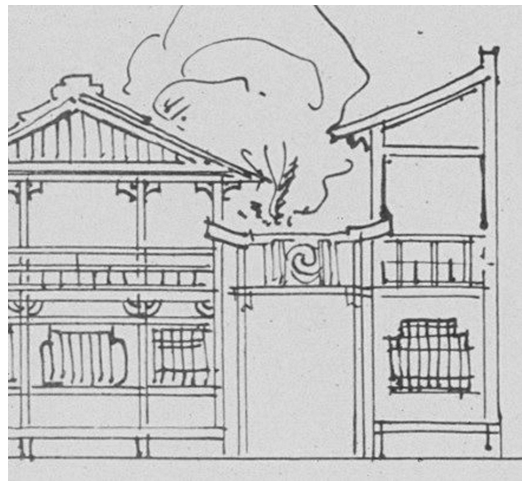
〈図1〉グレオン男爵による1番目の設計図

出典：Centre historique des Archives nationales, Paris, série F/12/4357[2] [218], 86 x 21.5cm

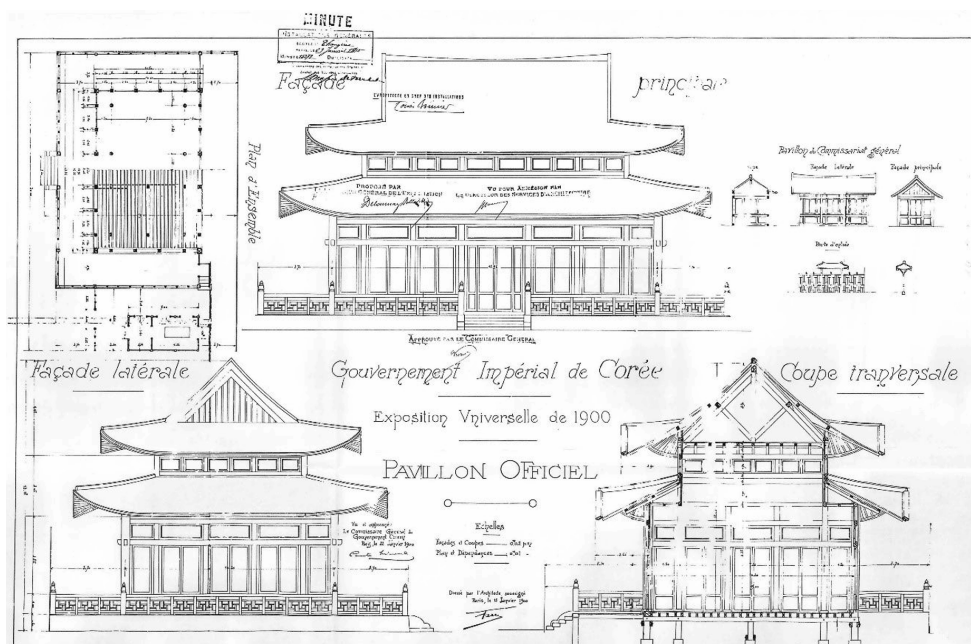


〈図2〉グレオン男爵による2番目の設計図

出典：Centre historique des Archives nationales, Paris, série F/12/4224[2] [216], 59 x 47.5cm

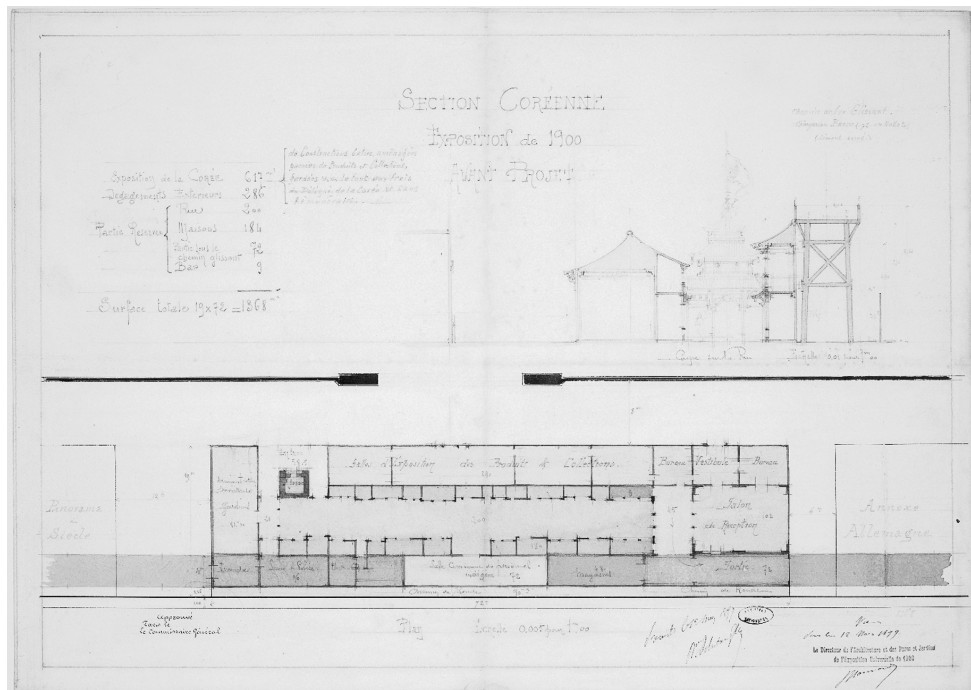


〈図3, 4〉グレオン男爵による2番目の設計図に描かれている太極文様（図2の部分拡大）



〈図5〉ミムレル伯爵による設計図

出典：Centre historique des Archives nationales, Paris, série F/12/4224/15373 [1] [213], 66 x 100cm



〈図7〉グレオン男爵による1番目の平面図

出典：Centre historique des Archives nationales, Paris, série F/12/4357[1] [217], 60 x 43cm



Palais du roi. — Dessin de Taylor, d'après une photographie.

〈図11〉 シャルル・ヴァラの旅行記事「韓国旅行 (Voyage en Corée)」に寄せられた景福宮勤政殿の挿絵
 出典：Varat Charles, "Voyage en Corée", *Le Tour du Monde, mai et juin*. 1892, Hachette (Paris), p. 313



〈図12〉モリス・克蘭が書いた「ソウルの思い出 (Souvenir de Seoul)」に乘せられた景福宮勤政殿の写真
出典：Courant, Maurice, *Souvenir de Séoul, Corée* : 1900, 1900, (Paris)